

緑の架け橋

会報第8号

2006年8月1日

第5回植林緑化派遣団〔2006年4月14日～19日〕

黄沙発生地域の沙漠に植林活動

～紅寺堡、平羅県から、中衛市へ。これまで580ヘクタール植林～



中衛市のプロジェクト実施地に立てられた記念碑の前で（06.4.16）

2002年のプロジェクト開始以来4年を経ることになりました。紅寺堡プロジェクトは2002年から始まり2005年に終了しましたが、それを継続する形で、今年からあらたに「日中青年寧夏中衛生態緑化モデル林プロジェクト」がスタートすることになりました。

中衛市は紅寺堡と同一の沙漠地帯で黄河流域にあります。これにより、現在、平羅県プロジェクトとともに2つの植林生態緑化活動を寧夏回族自治区でおこなっていることとなります。

今回は、日本からは佐藤晴男・緑の架け橋推進センター会長を団長に総勢13名の参加で植林活動が取り组まれました。この植林の取り组みの開始に当たり尽力いただいた金子哲夫・元衆議院議員も特別参加されました。

中衛市では初年度の開工式が行われ、現地ボランティアも中高生はじめ青年連合会、人民軍の若者など1千に及ぶ参加者で盛大な植林活動となりました。

また今年の派遣団は、黄沙発生激化という異常事態に遭遇し、生態緑化の意義をあらためて痛感させられた派遣団でした。



緑の架け橋推進センター

中国植林緑化活動協力事業

寧夏日中青年平羅県生態緑化林事業／日中青年寧夏中衛生態緑化モデル林事業
〒162-0801 東京都新宿区山吹町333辻ビル405 TEL.03-3268-4387 FAX.03-3268-6079
口座：中央労働金庫市谷支店（普）0858119 郵便：00130-9-425994

※本会報は事業主催（IFCC）の植林プロジェクト特集となります。

第5回植林緑化派遣団 活動報告 (2006年4月14日～19日)

4月13日(木)

出発前日、東京に集合し、事前学習が行われました。石川昇・緑の架け橋推進センター事務局長から、これまでの経過や寧夏回族自治区の事情について説明があり、特に新規にスタートする中衛市の模様については、昨秋、事前調査してきた緑の架け橋推進センター事務局次長の山内幸一郎さんより、映像を使ってレクチャーがありました。

その後、壮行会が行われ、意気込み溢れ結団しました。



壮行会に駆けつけていただいた
又市征治参議院議員

4月14日(金)

成田から北京へ向かうため、成田国際空港に参加者13人が集合し、佐藤晴男団長を先頭に中国へ出国。北京に到着後、天安門広場や故宮博物館を見学し、夕刻、全青連による歓迎会に参加しました。

わたしたちの植林緑化プロジェクトの中国側のカウンターパートとである、中華全国青年連合会(全中連)による歓迎宴は、中国共産主義青年団中央書記局・卢雍正書記(兼/中華全国青年連合会負責人)の出席のもと、湯本洲・全中連副秘書長も同席され、和やかに行われ、日本側参加者全員に記念メダルが授与されました。また同歓迎宴には、駐北京日本国大使館より中藤・一等書記官も駆けつけられました。

その後、空路にて寧夏回族自治区の首都・銀川に向かいました。到着時、深夜にもかかわらず、現地の方々が多く空港に出迎えにきていただき、盛大な歓迎を受けました。銀川市内のホテルにて宿泊。

活動を一回り大きく！～4年目に入った植林活動

佐藤晴男団長

今回(第5回)植林緑化の派遣は、1、昨年からスタートした平羅県生態緑化事業(04年開始～07年終了)の、2年目の植林を実施すること。2、中衛市において、生態緑化事業3ヵ年計画(05年開始～08年終了)の初年度の開工式行事と記念植林を実施すること。3、すでに終了している「紅寺堡プロジェクト(02年開始～05年終了)」のその後の、植林生育状況、管理状況を検証すること——等の目的で取り組まれました。

緑の架け橋推進センターが発足して、4年が経過していますが、春季の植付け植林(開工式行事含めて)と秋季の補植、あわせて都合5回目の派遣となりました。これまでのプロジェクトの植林面積は、今回の中衛市1年目分含めて、都合580ヘクタールとなります。

中国の広大な大陸からすれば、ほんの「点」にしか過ぎない面積かもしれませんが、寧夏回族自治区の中では、「点」から「線」として、そしてわずかに「面」へと着実に定着し発展しつつあり、地域の関係者からは大変評価を受けています。

もちろん、植林を通じた生態緑化活動は、沙漠化の防止、環境保全にとどまらず、地域住民あがての参加が経済活動への意欲向上をもたらし、児童のボランティア参加は自然と環境保全、地球への関心を高めるなど、教育上の効果も大きなものがあります。

第一期植林が終了した紅寺堡鎮周辺は植林だけでなく、都市計画による街づくりが平行して進められ、都市へと変貌しつつありました。

しかし、逆に、経済効果等が追求されるあまり植林地の管理(灌水、除虫等)、監督がおなざりになりかねない現状も散見され、現地指導者に苦言を呈し奮起を促してきたところでした。

第三期の中衛市での植林プロジェクトも、沙漠化の進行度合が深刻な中で自然と闘い、動植物の生存を守るという、遠大な事業です。私たちは単に植林するにとどまらず、隣人の中国大陸と中国人を理解し、ともに仲良く共存する道を探求する一助にしていかなければなりません。

そのため、さらに一回り大きく、植林に参加した仲間は周りの友人、知人、活動家の皆さんに参加を呼びかけていこうではありませんか。(06年7月)



寧夏回族自治区政府を表敬訪問

4月15日(土)



昨年(2005年)の植林跡(平羅県)

平羅県で、2年目の植林活動

この日は、「寧夏・日中青年平羅県生態緑化事業」2年目の植林活動のために、石嘴山市平羅県に向けて出発。途中、観光名所にもなっている沙湖見学を行い、午後からは石嘴山市の植林を現地の方と一緒に行いました。

現地のボランティア参加者が小学生も含まれた青少年が中心ということもあり日本側から参加者最年少の久保紀明さん(長野)が代表して挨拶を行いました。

昨年の開工式での植林、昨秋の補植などの結果が根付いていました。その継続として、2年目の今年は100ヘクタールにやなぎ、クロバナエンジュ、ナツメなど556,600本が樹植林されました。

植林活動に先立つ歓迎の催しには、石嘴山市共産党委員会の陶進副主席をはじめ、多くの要人が列席されました。

自治区政府要人の出席も得て、友好の歓迎宴

夜、寧夏回族自治区政府と寧夏回族自治区青年連合会による歓迎交歓会が銀川市内で行われ、政府から劉仲副主席など要人が出席され、青年連合会からは寧夏・青年連合会の楊玉経主席、中央から、湯本洲副秘書長、洪桂梅国際副部長、陸鉄鈞副部長も出席されました。

この歓迎宴に先立ち、派遣団一行は、寧夏回族自治区政府庁舎を表敬訪問し劉仲副主席との接見がもたれました。

4月16日(日)

1000名のボランティアとともに、中衛で植林を開始

早朝、バスにて黄河に沿いながら西に移動し、中衛市での事業の開工式参加に向かいました。現地ではマスコミや報道機関が取材に来ており翌日の新聞にその様子が報道されました。

開工式には現地の小中高生や青年団、人民軍などのボランティア、約1000人が参加し、式典の後、記念碑の除幕を行い、植林行われました。1年目となる今回は100ヘクタールにポプラ、アカシア、ナツメなど7種類333,000本が植林されます。

また、植林地では既に、沙の飛散を防ぐ「草方格法」が施行されており、準備の十全の様態をうかがうことが出来ました。

植林終了後、中衛市内に場所を移し、歓迎昼食会がおこなわれました。式典にも参加された、中衛市の党委員会・劉春曹副主席、孫貴宝副市長、市青年団陳宏主席など関係者が出席。佐藤団長はスタートに当たって、派遣団を代表して挨拶し「緑が根付くことは平和が根付くことと同じだ」と植林活動が日中友好の架け橋になることを希求すると述べました。その後、中衛市が誇る沙漠のオアシス「沙跛頭」を案内され、遊覧しました。



平羅県での2年目の植林(2006.4.15)



中衛の予定地の『草方格法』

紅寺堡を視察。課題の残ったその後。



その後、2002年から開始され昨年で終了した紅寺堡プロジェクトのその後を視察することになり、紅寺堡鎮を訪れました。党委員会関係者や桃自亮林業局長らが出迎えてくれました。3年目及び2年目植林地を見た後、記念碑のある1年目の植林地を見ましたが、プロジェクト終了後の管理に不十分さを伺えました。植林行政組織の変更などがあったとは言え、枯れている木も多く、また、水路も手入れがなされていなく、沙によって埋もれているところが多くありました。一時でも手を抜くと襲い掛かる自然の厳しさと、不屈の管理育成体制が望まれ、佐藤団長より現地の管理者に対し強い要請を行いました。同時に、プロジェクトが3年サイクルでおこなわれていますが、育成の時間も何らかの支援対象とすべきではないかとの思いも強くしました。

第5回植林緑化派遣団参加者(13名)

特別団長	金子哲夫(広島)	1班	岡崎 徹(東京)	鎌田篤則(東京)	久保紀明(長野)
			大城 啓(山形)	木下千鶴(富山)	
団長	佐藤晴男(大分)	2班	高山富治(大分)	蒲池順一(佐賀)	奥村正二(大分)
			坂口雅規(大阪)	下川徹也(大阪)	川口富弘(香川)

4月17日(月)

寧夏回族自治区で3件の植林プロジェクトを手がけてきていますが、寧夏の文化歴史に触れることも友好交流の重要な一部分です。午前中はモンゴル帝国に滅ぼされた幻の国、西夏王陵を見学しました。銀川市内では、海宝塔を見学、その後、途中で万里の長城(土壁で出来たもの)後を見学しながら空港へと向かいました。

北京到着時に、私たちを迎えたのは、厳しい黄沙の雨でした。黄沙が雨になると、泥雨となります。それも車のワイパーがきかないほどの沙混じりでした。初体験でした。今年は、例年に比べて発生回数が多く、4月現在すでに1年間に発生する回数と並んだといえます。自然の逆襲に、植林活動のささやかさを痛感させられますが、「点」から「線」、そして「面」へ、1本から、1人からと声を掛け合い、進むしかないなと思知らされた派遣団でした。

4月18日(火)

午前中は、抗日戦争記念館を見学し、日中戦争において日本軍が行った残虐な行為、戦争の悲惨さを体験。昨年は、日中戦争終結60周年で改装になっており、見学できませんでしたので、改装なった記念館見学を初体験しました。戦争発火点となったすぐ近くにある廬溝橋も周りが整備されていました。午後からは万里の長城を見学。

4月19日(水)

空路 北京から成田へ帰国。到着後 解団式を行い解散。



中衛市での植林活動 (06.4.16)



プロジェクトが終了した紅寺堡の現状 (06.4.16)

植林活動を日中友好の架け橋へ

～講演を通じ、植林模様を地元伝える～

高倉誠二 (大分県日田市)

日田市天瀬学校休職共同調理場・次長 (現)

第3回植林緑化派遣団(H17・4)に参加させていただき1年が経過した。次に出かける日を心待ちにしている状態だが、第3回派遣団27名、楽しい思い出いっぱいである。中でも大分県から6名の参加で心強く、またTOS(テレビ大分放送)が同行取材という願ってもない展開だった。さらに、大分合同新聞が発前、帰国後と、継続して記事として扱ってくれたのはうれしい限りである。

植林をして沙漠化を防ごう……何と大きな構想だろうか。中国では、その実現に向け今、事業を進展させ、日本はそのための支援をしている。その支援の一つとして実際にその現場に行くことが出来たのだ。極めて貴重な体験であった。

この植林活動を、自分の体験談として公民館教室の寿学級(高齢者学級)で行うことを思い立った。そして、今年の2月、講演は実現した。しかも町内12の学級全部でおこなうことになった。しかし、いざ講演が現実になると大変である。地球環境について、砂漠化について、せかいの中での日本の役割は、など改めて勉強させられることばかりである。TOSの放送映像ビデオも使った講演は、映像に話し手の自分も登場して、活動を身近に伝えることが出来て、好評であった。

私たちが訪中した当時は、「歴史問題」で日中関係が険悪の状況だった。だから、私の話を聞いた人からは、「植林緑化」というこんな立派な活動があって、中国人の全部が反日でないことがわかり安心した、という感想が様であった。

私自身、講演と言うのは初めての経験だったが、満足できるものとなった。内容の素晴らしさに救われたと思っている。機会があればまた話をして行きたい。”講演料無料”を売りお言葉にして。(新聞記事/大分合同新聞 2006年3月4日)

天瀬町の
高齢者学校
で公民館長が講演



講演する高倉誠二さん

を取り入れて講演。派遣団は砂漠化が進む中国に木を植える活動で、県内

寧夏・日中青年平羅県生態緑化林事業/日中青年寧夏衛生態緑化モデル林事業

事業主催団体 IFCC 国際友好文化センター

事業助成団体 日中緑化交流基金

推進協力母体 緑の架け橋推進センター

カウンターパート 中華全国青年連合会

事業実施期間 2004年～2008年